

1-1 過去の経験と配下職員を信頼し、チーム力による対応

～既往最大規模の洪水が予測される事態でのダム管理～

1. 立場と仕事

政府系法人に入社して26年目、下流域に大規模な市街地を抱える河川上流に設置されたダムにおいて所長として従事し、ダムの維持・管理や関係自治体との調整を行った。

2. 遭遇した事態

当該ダムは完成後30年が経過しており、過去に10回以上洪水調整を行った実績があった。下流域の市街地においては年々人口が増加しており、幹線道路の整備等も進んでいた。一方、近年は台風や自然災害の激甚化、大規模化が目立つようになり、洪水調節等の実施にあたっては、国や自治体など関係機関との連携がますます重要となってきた。

このような状況の中、大型の台風が接近し、既往最大規模の洪水が予測される事態となった。台風由来の豪雨であったが、台風に刺激を受けた前線による降雨も激しくなり、当該ダムの影響範囲における降雨量の定量的な予測が困難であった。

当該ダムはダム以外の残流域が全体の2/3もあるという特徴もあり、ダム操作の判断が非常に難しい状況の中、洪水被害を出さないよう早い段階で決断を下すことが求められた。

3. 対応内容とその結果

降雨予測は時々刻々と大きく変化するため、あくまでも参考として考え、実降雨分布の変化をもとにした流入予測を判断の主材料とした。これは、過去の洪水対策の経験と、現地状況を熟知した職員のノウハウによるところが大きい。

この結果、精度の高い流入予測とその対応を実施することができた。今後のダムへの流入量を逐次予測し、加えて下流の河川の水位状況を把握した上で、放流による下流への影響を勘案しつつ放流を行った。道路冠水が3カ所ほど発生したが、家屋被害はゼロであった。これは過去の台風被害と比較して非常に小さいものであった。

また、流入量予測に基づいて国や自治体にも速やかに情報提供を行い、避難指示等の対応をとってもらうことができ、住民からの問い合わせや苦情もなかった。

この経験において、自然災害発生により時間的余裕がない中で、洪水被害を最小限に抑えるための危機管理決断力を発揮できたと考えている。切羽詰まった状況の中でも過去の経験を冷静に顧みることや、配下職員の知識、経験を尊重しチーム全体で取り組むこと、また実績データに基づき適切な判断を行うことで下流の被害を軽減することができたものと感じている。

ダムは下流の河川の状況を踏まえ、最大限活用し、下流の被害を軽減することが最も重要であると考えます。

また、刻々と状況が変わっていく中で、国や自治体等の関係機関と最新の情報を共有できたことも良い結果につながった要因であると考えます。